

巻頭言

臨床心理学部 学部長 香 川 克

臨床心理学研究報告第 11 集が刊行されることになりました。この第 11 集は、「平成最後」の臨床心理学部の研究報告です。

この「平成最後」という言葉は、昨年末からありとあらゆるところで繰り返されているように思います。今年はやはり、一つの時代の「節目」なのでしょう。そして、私たちの臨床心理学の世界も、大きな「節目」を迎えつつあります。昨年度の巻頭言でも濱野前学部長が書いておられたように、心理職の国家資格「公認心理師」が誕生する日が目の前に迫っているのです。思えば、平成が始まった 1989 年は、臨床心理士の資格認定がスタートした翌年にあたります。平成の最初と最後に心理職の二つの資格が誕生したということになります。

平成の 30 年の間に、私たちの社会では、いろいろなことが変化して来ました。平成の初めには、「成長」というトレンドは暗黙の前提でした。しかし、平成が終わろうとしている現在、今後の 30 年を見通した場合に、人口を始め様々な数値的な指標が減少し、「成長」とは逆の方向の変化が起きていくでしょう。

この新しい時代の中で、臨床心理学はどのように援助的な関わりを構築していけばよいのか。また、その教育はどのような形を目指せばよいのか。単に、国家資格「公認心理師」の養成に乗り出すだけでなく、「臨床心理士」が目指してきたものを新しい時代の中でどのように継承し、さらに鍛えていくのかが問われているのでしょう。

人を支え育てる多様な専門職の営みとも手を携えながら、今後とも一步一步進んでいくことを願っています。